

國學院大學學術情報リポジトリ

討議の記録

(平成二十一年度國學院大學人間開発学会第一回大会
國學院大學人間開発学会設立記念公開講演会・シン
ポジウム人間開発学研究の胎動--大学の行方を見据え
て) --

(公開シンポジウム人間開発学の樹立に向けて--展望
と課題)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田沼, 茂紀, 柴崎, 和夫, 安野, 功, 一, 正孝, 原, 英喜, 奈須, 正裕, 太田, 直之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001177

《コメント》

コメンテータ 奈須正裕氏

昭和三十六年生。東京大学大学院を経て、神奈川大学助教授、国立教育研究所教育方法研究室長などを歴任し、現在上智大学総合人間科学部教授。博士（教育学）。専攻は教育学・教育心理学。『教師という仕事と授業技術』ほか、著書多数。

本日はこういう機会をいただき、ありがとうございます。とても幅広いというか豊かなお話でしたので、コメントというのも難しいのですが、私なりに面白いなと思ったことや、なるほどと感じたこと、あるいはこれはどうなんだろうと疑問に思ったことなどを率直にお話し申しあげて、先生方の議論につながられればと思います。

まず人間開発学ということですので、人間とは何かという主題、それからそれを開発する、教育するとは何かという主題、そしてこれを行うための学をどう構築するかという主題、という三つの話題にわけて考えてみたいと思います。先生方のお話も、そうした三つの所に集中していたかと思います。

まず人間とは何かということにかかわって、田沼先生が最初に関係性の中での人間なのだと、近代的な人間観は、個人的で孤立したものになりがちですが、そうではない。関係性の中にあって初めて人間たり得るんだということを指摘されました。

これはとても重要で本質的な視点ではないかと思います。

それから、一先生、原先生のお話の中では、人間が身体を持つ存在だということ。当たり前のことなのですが、これも近代の中で身体性というのは、ややもすれば見過ごされてきた。特

に教育界では、知的な面に偏重しがちであったと思うんですね。それに対して、お二人の議論はむしろ身体としての人間、その限界性と可能性、それを開発することの深い教育的、あるいは人間学的な意味に言及されていて、私も教育系の人間として、人間をとらえる際の視点の幅広さというか厚みの大切さを実感させられました。知への偏り、あるいは知のある種の優越というんですかね。教育の分野において、そういうことがありはしなかったかなと、自己反省しているような次第です。

一体人間というものをどう見ていくのか。トータリティとして見るということが、一先生、原先生のお話にあったと思います。すし、一先生のお話の中にあつた、「わかる」と「できる」の違い。「わかる」ということが認知的な理解であるとすれば、「できる」というのはそれが身体的に動くということだと思えますが、これは大事だなと。

それはもう一つの問題である情緒ということともきつと関係していて、感動するという言葉がありますが、夭逝された横浜国大の藤岡完治先生が「感動するということは、感じて動くことだ」とよく言っておられたのを思い出しました。本当の学びとは、人が感じて、つい身体が動き出してしまうようなものだと言うんですね。そういう知的なものと、身体的なものと、情緒的なものが一体となった学びなり育ちというんですかね。そういうことがとても大切なんだなあ。國學院が新たに樹立しようとしておられる人間開発学というのは、そういうことをお考えになっているんじゃないか。だから二つの学科が有機的な連関を取り結びながら、学部として組織されているのかなと、納得したような次第です。

また、原先生の生涯発達の、トレーナビリティというお話の中で、老化していくのではなくて、身体の状態に適応した発達、訓練可能性があるんだというお話があつて、直線的ではない開発と言ふんでしょうか、開発という言葉にとっても広がりが出ているという感じを持ちました。

私の所属も上智の総合人間科学部という、文学部から分れてできた学部ですが、上智では身体ということをも十分に考えてなかったなと、そこは弱みであつたなと、今日感じさせていただきました。また、日本に多くある人間学系の学部でも、ややもすれば欠落しがちな視点ではないかと。むしろ身体のことを深く、また他の部面と関連させて考えることによって、人間の知性だとか感性だとか徳性ということも新たな景色を伴つて際立つてくるんじゃないか、ということに気付かせていただけたことを、うれしく思っています。

次に開発という問題です。このように人間をトータルに捉える中で、ではそれをどう開発するかという問題もまた、いよいよ立体的に深みを持って立て現われてくるのではないかと思ひます。まず、田沼先生のご発言の中で、デュニーを引かれて、教育とは未来への準備ではなく、今を良く生きることであり、今を良く生きるべく、共に教師が関わっていくことだというお話が印象的でした。

これまでの日本の学校教育は、ややもすれば投資としての教育でした。教育をしておけば先に良いことというか見返りがある。これは世界的には八〇年代以降、日本ではバブル景気があつたので九〇年代以降になります。雇用環境が変わり、いわゆる終身雇用制・年功序列賃金体系が壊れましたから、子どもに

教育的な投資をしておけばいい企業に就職できて、それが一生ついてまわるといふ関係は、もう崩れたわけですから、大学は未だにそれにしがみついている所があるわけです。そこを抜けていく意味でも、大学教育もまた、教育は未来への準備ではないというテーゼ、これが基調にあるというお話は大切なあと。今の時代における大学も含めた教育、あるいは教育学、開発学ということの基盤に据えるべき視座ではないかなと思ひました。

またそれは当然、大学教育のあり方、具体的な教育方法や、本学部で編み出されるカリキュラムや、カリキュラムの運営にまで及んでいくことであると。天野先生のお話にも、教育と研究を分け、研究が優越するという時代ではもはやないのだという指摘がありました。が、だとすれば、そういう教育を大学教育として実践する中にこそ、教育学の学としての再構築の可能性が見えてくるのかなと、考えた次第です。

同時に、私たち教員の学生に対する見方は、特に初等教育学科において、教員免許をとる学生さんが子どもをどういふ存在として見るか、ということにも直接的、間接的に大きな影響を及ぼしていくのではないかと思ひました。その意味でも、子どもは未来に向けて今を我慢して生きる存在ではなくて、今をより良く生きる存在であり、今をより良く生きることが将来を実現することにつながるんだという人間観。デュニーに典型的な人間観だと思ひますが、まったくこれだよいかという議論、つまり批判的な吟味も含めて、本学の研究、教育の中で活発にしていけることが大切なのかなと考へました。

また、そのこととの関係で柴崎先生の最後のご提案がとても

興味深く、開発というけれども、開発がうまくいった状態を一体どういう状態と見なすのか。これを定義することは難しいし、測定するとなるといよいよ難しいのですけれども、だからといってあまいで良いわけでなくて、やはり慎重な議論と、可能な範囲でそれを測定に持ち込むことも大事だろうと。少なくとも教員の間でそのことについてしっかりと議論することが大事なんだという御提案は、今後の大学教育、これはシラバスをしっかりとすると、教育評価の問題としてきちんと評価基準を作ることなども、小中高高等学校で言われ始めてきましてけれども、そういうところを大学でもしていく必要がある。またそれが、私たちが研究として何を目指すかということにも関わってくる、というお話として伺いました。

三つ目の最後の話題として、学ということに話を進めましょう。これが一番大きなことでしようけれども、そういった「人間」を「開発」することを目指す「学」として、私たちがどういったものを、どう構築するかですね。これはいろんな視点、人文系の先生、自然科学系の先生、それぞれのお立場からの問いがあったわけですね。

まず、一先生のレジユメの中に、科学総体ということを押さえたうえで、私の諸学の立場をしっかりと認識することが大事だという御提案があります。この学部には、広くいろいろな諸学の立場の先生がおられるし、私の学部なんかもそうですが、これは天野先生が言われた、伝統的なディシプリンの中に閉じたもった学問体系・学問構成ではなくてきたということだと思えます。そうになった時、私たちが学生時代以来学んできた伝統的な近代的諸学が統合され、新たな機能を果たすようになってく

てくる、というかそうしようと努力するわけです。それが新しい学の構築の一つの姿なんだろうと思いますが、その際に科学総体というものを押さえ、そこにおける私の諸学の位置を再度しっかりと認識するというのが大事だという御提案ではないかと思えます。

なるほどと思いますが、とは言え、科学総体とはなんだろうかという問いが実は難しいし、さらにそれを認識するとは私たちの実際の行為としてどういうことかというのが、とても難しい。でもそれやっていると、私どもの学部なんかでも総合人間科学って、何が総合なのかよくわからない。ただ人間科学をやっている四つの学科が集まっただけじゃないかと、よく言われるわけだし、実際そういう面もなきにしもあらずで（笑）、これを総合する、インテグレートするとはどういうことなのか。それはつまり、インテグレートされた科学総体というものをまずイメージし、それに対して私の学的立場がどこに位置付くかを考え、どういうインテグレーションあるいは融合・フュージョンというようなこともあるかもしれませんが、あるいは対立するようなことがあってもいいのかもしれないが、それが可能かということ、図式的に考えていくことなのか。現状における諸学の関係構造を見ていく、これはもはや近代学問の成立期とは違って絶望的に難しい作業でしょうが、でもそこから逃げないことが大事なんだと思います。

そう考えた時に、とりわけ教育学とか人間開発とかが難しいと思うのは、伝統的な一九世紀型の近代科学というのは、方法論や認識論をベースにできているんですね。たとえば歴史学であったり心理学であったり社会学であったりするわけです。そ

れに対して伝統的な教育学を考えてみると、教育学とは方法論ではなくむしろ対象領域によって規定されているわけですね。

教育について、例えば歴史や哲学や心理学や社会学や政策研究といった認識論的な立場、方法論で関わってくるわけで、これは例えば心理学や社会学科とはずいぶん構成が違う。心理学科では心理学という共通の方法論をもった人たちが、子どもや社会や産業や安全といったそれぞれ異なる対象に関わっていくわけで、多様な対象に対する一つの学問的立場、認識論的立場で構成されています。一方、人間開発とか教育の学というのはそうではないわけで、どちらかというと対象学問なわけですね。

その意味で、他の近代諸学と比べても、そもそも教育学自体のアイデンティティを何にどう求めるかが難しい問題で、天野先生がおられた当時に東大で—私も二十数年前に大学院生として在籍していたのですが—教育学は独自の固有の学として成立するのか、みたいな主題のシンポジウムが学部主催で開催されて、先生も学部長としてご登壇されておられました。私たちも大いに期待して聞かせていただいたんですが、東大の名だたる先生方がさまざまな角度や専門性から、教育学を独立した固有な学として打ち立てていくんだといった提案をされる。個々の提案はさすがに斬新だし納得のいくものなんですけれども、聞いている大学院生としては、でも総体としてはどうも駄目くさいという（笑）感じをもっちゃうんですね。あまりに一九世紀型の学問に慣れすぎていて、それ以外の学成立のイメージを持つのが困難だからかもしれません。で、二〇年たつてどうだといわれると、今度は私たちがこの間頑張ってきたのかという話なわけで、これには忤怩たる思いがあるのですが、決してう

まくはいっていない。

つまり一つの難しさは、対象学問ということ。人間開発もそうなんでしょうが、対象であり営みであるわけですけど、それを学として構築するとはどういうことか。もしかすると、一九世紀型の学の体系、それを形で体現している一九世紀型の大学、学部、学科の構成では無理なのかもしれない。まあ、だからこそ学部の構成を伝統的なものとは違うものへと根こそぎ変えてみるというアプローチに大きな可能性があるとも言えるわけで、新富先生を中心にそれに挑戦しようとする学部を立ち上げられたんだと思いますし、引き続きそういう気概で頑張っていたきたいなと思います。

そのこととの関わりで重要になってくるのが、学的な方法論ですね。人間や教育という対象への迫り方ということになってくるわけですが、これは、柴崎先生がとてもシャープにお話し下さいました。自然科学的な方法論、近代科学の方法論で考えた場合に、人間研究あるいは人間開発といったような実践的なことが可能なんだろうか。これは根本的な問いだと思います。私の考えとしては、やはり厳密な自然科学にはないのだろうと思います。ただその際、人間開発が目指す学というのは、法則定立的な、ノモセティックな学なのか、あるいは個性記述的な、イデオグラフィックな学なのかということが重要な論点ではないかと思いました。柴崎先生のお話は、多くの自然科学に代表される法則定立的な学として人間開発を考えた場合に、非常な限界があるということだと思います。

ではイデオグラフィックなやり方、つまり一人ひとりについて、その個性的なあり方を丁寧に記述していくというアプロー

チ。その記述やそこからの意味抽出の方法論は人文科学的でしかあり得ないのか、科学的にはなり得ないのかというと、そんなことはないでしょう。先生がおっしゃったのは多数データを集めて統計的に解析し、蓋然性をもって原理とする、要するに確率論的にものを考えていこうというお話だったと思います。が、個別的な事象に対しても、そこに多数データを見出すことは可能で、統計学の中にも多数データの平均値を求めるような方法が一方にありますけれども、一つの個別事例に対して繰り返しデータを集める、N=1統計、シングルケースの統計というものもあります。そういうやり方で、一人の人間の中にある構造的・法則性を見出していくこともあって、つまり個性記述的でありながら自然科学的、あるいは数学的な方法を適用する可能性があります。

ここで、私たちが知りたい人間というのはどういうものなのでしょうか。多数のデータをつぶした平均的人間像が意味を持つこともありますが、そうじゃない場合もあるんじゃないか。昔バラエティー番組で平均的日本人像という企画があつて、つまり鈴木さんで年収がいくらで、四人家族でつて、多くの条件で日本人の平均値に該当する個人をテレビが探してきたんですが、その鈴木さんを平均的日本人だと私たちが思うかというと、思わないんですね。つまり、全ての特性において平均値を出したのが人間の本質かという点、多分そうではない。そうではなくて、全ての人間に共通するような、ある本質的で安定した構造を私たちは知りたいんじゃないか。すると、一人の人間について丁寧に記述をしていく、イデオグラフィックな方法論の先でこそ、人間の普遍には到達できるんじゃないか。

例えば、フロイトは精神分析という学問を築きましたが、彼は多数のデータを集めたわけじゃなくて、標準的な人間から大きく逸脱した病理的な人間を丁寧に記述することを通して、その奥に人間の普遍を見出しましたし、犬の実験をしたパブロフは、十匹の犬のデータを足すことはしませんでした。一匹の犬について繰り返しデータを求め、そこで安定した構造を見出し、それが別の犬でも成立することを確認し続けたわけですね。このような科学的で数学的な方法を通した個性記述的追究というのも、人間科学の方法として可能性があるのではないかと考えるわけです。

方法論の問題は、先生方の学部は人文・社会・自然それぞれの方法論に強い方がいらっしゃるから、むしろそこで共有し共通しながら、学的な可能性、方法論的な可能性を追究することができるんだらうなと思って、とてもうらやましく思っております。

もう一つ、学的なことという点でいうと、その学は単に孤立した空間の中にあるわけではなくて、これは安野先生がお話になったことですが、社会や国家との関係で学というのでも成立する。柴崎先生も動いていくものだという言い方でお話しされましたが、それをどう見るか、というのも重要な問いだろうと思います。

安野先生のレジメの中に、旧来の教育学というのは、前の教育基本法の中であったという記述があつて、実はこれに私はドキッとしました。つまり、もつと教育学というのは普遍的で時空を超えたものだと思っていたからです。

教育学の起源をどこに求めるかは議論があつて、一つの典型は、人にもものを教える、人がものを学ぶ、知識とは何か、と

いった思索に起源を求める見方で、するとソクラテスあたりが始祖になります。これに対し、近代国民国家ができ、今日にまでつらなる学校教育が確立されてくる中で教員養成の必要が生じ、教育に関する知の体系が整備されてくるあたりを考える立場があります。ヘルバルト（ヨハン・フリードリヒ・ヘルバルト）あたりに教育学の実質的成立を求める見方ですね。

どちらをもつて教育学の成立とみるかというのには微妙な違いがあつて、日本でも、教育学というのはソクラテス以来の、知ること、教えることとは何か、という根源的な問いで動いている部分もありますが、教員養成を基盤にし、国の教育政策の中でどんな教員を育てるか、という文脈の中でできてきた部分もある。特に人間を開発するという場合には、一方ではその人間がどんな風に育つことが社会的に望まれてくるのかということと、もう一方では、これは田沼先生が専門だと思えますけど、人間が人間として育つというのは、根源的にどういうことなのかという問題もある。この二つの問いの間で揺れているのが、教育や人間開発という学問じゃないかなというふうに、安野先生のご報告をうかがいながら思わされたわけです。

もう一つ安野先生の問いの中で伝統ということが語られましたが、ではその伝統ということの奥にある日本って何だろうということも、難しい問いですね。そもそも、私たちは何となく日本といっているけれども、いつから日本なんだろう、どこまで日本なんだろうという問いは、それこそかつて中世史の網野善彦先生なんかがとてもラディカルな問いを突き付けたわけですから、今日でもなお難問山積です。この点、やはり國學院は神道と国学をベースにした大学ですから、日本とは何だ

ろうか、そこにおける伝統とは何だろうかということを、重要な問いとしてどこまでも問い続けながら歩んで下さるとありがたいと感じました。特に社会科という教科はそういう教科だと思いますし、何より社会科のエキスパートである安野先生がおられることをとても頼もしく思うんですね。その辺を批判的に吟味、追究しながら、社会や国家との関係で人間開発の学をどう構築するのか、という難問に挑んでいかれることを期待したいと思います。

社会や国家と人間開発との関係ということでは、常に受け身になるのではなく、こちらから打って出るというんでしょうか、そういう見方も一方で可能です。社会科が戦後生まれで最初の指導要領をお書きになった、重松鷹泰先生の言葉にこういうのがあつて、「教育は社会の変化についていくのではなくて、社会の変化を生み出すものである」と。つまり、子どもをどう育てるかということが、次の世代の社会の担い手である子どもによつて実現されるんだと。だから、社会がこう変化するから僕らがこう子どもを育てるんじゃないかって、子どもをどう育てるかを通して、次の社会を作るんだと。教育とはその営みなんだという発想で、いわゆる社会科の初期の志ということなんだと思いますけれども、社会・国家と私たちの仕事との関係性をどう見るかというのは、とても重い、重要な問いだなと感じました。

先生方のご議論をこんな風に、多くの側面でも興味深く、また触発的に受け止めさせていただきました。最後に一点、今日の先生方のお話には出なかったことなんです。できればお願いしたいと思うことの中に、宗教的な視点をどう扱うかというのを申し上げたいと思います。

私の大学はカトリックの学校で、宗教と人間、そして教育ということ、常に研究、教育の視座として大切に扱っていいようにしています。私自身は信徒ではないのですが、だからこそミッシヨン・スクールに勤めさせていただく中で、宗教という問題が教育とか研究を考える際に、とても重要な視点なんだと、むしろ強く思われました。そして日本は特に戦後、宗教を教育や研究から断ち切ってきた、ということがあるんじゃないか。でも特定の宗教ということではなくて、何か宗教的なもの、絶対的なもの、スピリチュアルなものというんですかね。そういうものと私たちの関係性ということ自体は、人間について考える際、避けて通れないことじゃないのかなと、むしろ考えている次第です。

その意味で、本学は、私どものようなカトリックの学校とまた違ったお立場や問題意識なり角度から、宗教性や宗教的なもの、これは何も神道ということに限らなくてとお考えいただきたいのですが、それらを人の教育や、人間や社会の研究を進める際にどう位置づけ考えるかという現代においてこそますます重要になっている問題を、深く追究できるのではないかと思います。また、私たちのようなミッシヨン系の大学と一緒に、研究を深めあい、議論の機会を持つといったことも、お互いにとって、さらには今はそういったことに興味を抱いていない研究者や大学にとって建設的なのではないかと考えるのです。それは実は、戦後の一つの学問の在り方や、大学の在り方を、意外と面白い所で動かす契機になるんじゃないか、という風に考えております。

すみません、まとめられませんけれども、こんなところで私の

感想ということにさせていただきますと思います。

※

《討議の記録》

登壇者 田沼茂紀 柴崎和夫 安野功 一正孝 原英喜

奈須正裕

司会 太田直之

奈須正裕氏からのコメント終了後、五名の発題者と奈須氏を交えた討議が行われた。最初に各発題者より奈須氏のコメントに対する再コメントがなされた。

まず田沼氏より、人間開発学を評価するのは、個人やその個人の生き方を見る周囲の人々であって、長期的スパンで見ている必要があること、また、人間開発学とは、個人が良く生きることを実現するための人間力を導き出すものであり、こうした人間を導き育むいうために、大きな意味での教育学をベースとしながら、隣接する学問を収斂していくことが必要であること、などが述べられた。

次に、柴崎氏は、自然科学的に考えた場合の人間開発学樹立の難しさ、個別記述から万人に共通するものを抽出することの難しさを改めて指摘した上で、困難ながらもそれを試みるのが教育や教育学であるとの考えを述べた。また宗教の問題については、迷信やスピリッツは科学的には証明できないが、科学はこれを信じることを否定するものではなく、信じる人の立場を尊重するのが科学的立場であること、現代の社会や教育の中ではこうした視点が欠けていること、などの指摘があった。

安野氏からは、これからの教育の中核になる人には、学習指